

息をしていること。体を動かせること。私がこの世に、父と母を介して生まれたこと。出会ったたくさんの人たちのこと。あふれ出る恩寵にふさわしい者でないにもかかわらず、神は私に目を留めてくださる。かたじけなさをごみ上げる。

教父バジリオは言う。「(主は)与えられた恵みのためにわたしたちがただ主を愛するだけで充分と思われる善良な方である。私の感動を表すために、これらすべてのことを思いめぐらして数え上げると、わたしは畏れ、茫然となる」(『長文の修道会則』より)

神への感謝とは、そのあまりの恵みの豊かさに、心が打ち震えることのように。神の痛みと愛の深さのなかで私の弱さと罪を帳消しにしてくれる、かたじけない贈りものをいただいで、心が深く感じ入ることなのだろう。神は、何も見返りを求められない。不釣り合いなのだから、土台無理なこと。ただ、心が打ち震えればいい。大切な人と思うとき、私たちの心も多くは求めない。

クリスマスなのだから、心からそのかたじけない贈りものをしっかりと抱きしめよう。道に迷って、途方に暮れるときもあるだろう。それでも、すこしの間、立ち止まって、かたじけなさを胸に前進しよう。

神さまはだれよりもそばにいて

寒くなってきました。みなさんお元気でしようか。体調はいかがですか。心の調子はいかがですか。気温は下がっても、いつもあなたがかい心でいたいですね。

落ち込んでつらいときや、心配事で眠れないときは、この私に優しく語りかけてくれる親を思い出しましょう。実際の両親でもいいし、想像上の親でも構いません。穏やかな表情で、あたたかい声で語りかけてくれる、最高の親を。

お父さんは肩に手を置いて、力強く励ましてくれます。「だいじょうぶだ、父さんがついてる。心配するな」

お母さんはそっとおふとんをかけながら、語りかけてくれます。「だいじょうぶよ、お母さんここにいますからね。安心してお休みなさい」

ふと、イエスさまのことを空想します。聖書にこそ載っていませんが、イエスさまはもしかすると、どこかでこんなふうに話した



### 交わり

心が打ち震えるほどに柔らかくなったから、その喜びを味わおう。ずっと私をとらえていたものからの自由を噛みしめるかのように。そうしたら、それを分かち合うのがいい。囚われからの解放を祝っている人々とともに自由を謳歌しよう。

囚われを感じている人のうめきに敏感になれないものだろうか。クリスマスこそ、声なき人の声が聞こえるときなのだから。私のうめきを神は聞き洩らさなかつた。すくいあげてくたさつた神のいくしみをまだ声にならないうめきをあげている人々と分かち合おう。

すべての艱難にもかかわらず、人生は美と意味に満ちている、と弱冠二十八歳



晴佐久昌英

## 福音、全開。



の女性、エティ・ヒレスムは、アウシュビッツに送られる前に日記に何度も書き残している。彼女の信念は、同じ状況下におかれたユダヤ人の兄弟姉妹を寄り合わせる結び目の役割を果たした。神と人間を信じるのがあれば、難しいときにあって、逃げ出すことなく、現実を見つめた一人の女性の生きる決意は、人生と世界を神からの贈りものにとらえている姿勢そのものだと言える。交わりはいつも、人生の肯定から生まれてくるものだ。

クリスマスとかけて、贈りものと解く、そのころは？

次のエティの手紙のなかにその答えを見つけた気がする。

「わたしはまた、再び地球をもっと住みやすい場所にするのは、ユダヤ人のパウロが第一の手紙の第十三章でコリントの市民に描いて見せた愛のみだということとを、幼稚かもしれませんが頑固に信じています」(『生きる』の意味を求めて)より

クリスマスは、神の限らない恩寵と私の精いっぱい感謝と他者との交わりによって裏打ちされた愛そのものである。ひねりはないが、クリスマスのころは、やっぱり、愛だと信じたい。

かも知れない、と。

「あなたがたのだけれが、自分の子どもが落ち込んでいるのに、『だいじょうぶだ』と励まさずに『おまえはもうだめだ』と脅すだろうか。怖がっているのに、『心配するな』と励まさずに『わたしは関係ない』と見放すだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子どもを励ますことを知っている。まして、あなたがたの天の父は、苦しみの中で救いを求める神の子たちを力づけてくださるに違いない」(空想の福音書)

私たちはみんな、幾つになっても小さな子どもです。とても弱くていつも心配で、親の愛なしには生きていけない。だからこそ、私たちがつらいとき、心配して眠れないとき、神さまはだれよりもそばにいて、優しく語りかけてくださいます。

「だいじょうぶだ、わたしが共にいる。心配するな」

「だいじょうぶよ、あなたを守っているから、安心して」

●はれさく・まさひで  
東京教区司祭。1957年東京都生まれ。1987年司祭叙階。現在、カトリック多摩教会主任司祭。

クリスマスの本質

神さまは人類を、よろこばせるため、ご自分の喜びに与らせるために生んでくださいました。神さまは決して自ら生んだわが子を虐待したりしません。確かに生きていけばつらいこともあるけれど、どんな苦しみも恐れも、神と人の親子関係がいつそう深まるために役立っています。試練のときにこそ、子どもはいつにもまして親の愛を求め、親はいつそうわが子への愛を深めるからです。

天地万物の歴史は、そのように神と人との愛の絆が次第に深まっていくプロセスだと言えるでしょう。そうして時は満ち、天の父の愛は極まり、苦しむ人類へのあつ

い愛はもはや止めようもなくあふれ出して、ついある日、神は人に直接語りかけ始めました。すなわち、イエス・キリストの誕生です。

イエスのことばとわざ、その愛と死のすべては、神の愛のあふれにほかなりません。イエスが誕生したということは、神が直接私た

ちに語りかけ始めたということですね。神さまが苦しむわが子に手を伸ばし、その手で抱き上げて「だいじょうぶ、わたしがここにいます」と宣言し始めたということですね。

神がまことの親として私を愛している。この、とてつもなく素晴らしいメッセージを「福音」と言います。イエスは福音を愛するところなく語り、神の愛の証としての死と復活によって、イエス自身が福音となりました。神さまは、イエスにおいて、ご自分の愛のすべてを現ししてくださいました。イエスの誕生は、福音の誕生にほかなりません。私たちのために、ついに福音が誕生した。それこそが、クリスマスの本質です。

イエスさまからの「だいじょうぶ」

このたび、クリスマス絵本を出版しました。「あぶう ばぶう」というタイトルで、生まれたばかりのイエスさまが人々を救うお話です。この絵本を作ってほしいと最初に編集者から依頼されたとき、迷わずこう申しあげました。



んじ、美しさを知っている。なのに、なぜみんな苦しみ、争い合い、絶望していくのか。それは、福音を知らないからです。だからこそ神はイエスを遣わし、イエスをとおして、今、ここで、あなたに福音を語っているのです。

苦しむ現代社会に足りないのは、福音です。恐れるあなたに足りないのは、ただひとつ、福音なのです。キリスト者がイエスさまとひとつになつて福音全開のお手伝いをするならば、どれだけ多くの人

が救われることでしょう。ふと思ひ出す出来事があります。一人の女性が死に場所を求めてさまよっていました。最愛の娘が突然亡くなり、絶望して生きる力を失ってしまったのです。実際にガス管をくわえたり樹海に踏み入っ

「お引き受けします。子どもたちにも福音をまっすぐに伝える絵本にしましょう」

言うまでもないことです。それが神の望みであり、キリスト教出版社が絵本を出す目的でしょうか。

ひとつのイメージがひらめきました。生まれたばかりのイエスさまが、絵本を開いた子どもを見つめ、その子に向かって手を広げて「だいじょうぶ！」と直接語りかけるというイメージです。

もちろん、生まれたばかりのイエスさまはまだしゃべれません。「あぶう」とか、「ばぶう」とか言うばかりです。しかし、もうすでにイエスさまのところには、つらい思いを抱えた羊飼いや苦難の道を歩む博士たちが救いを求めて来

ているわけです。イエスさまは黙っていられません。思わず「だいじょうぶ！」と叫んでしまいます。救い主の「だいじょうぶ！」は完全です。そのひとことで、羊飼いや博士たちも救われます。

それは、昔話ではありません。今、現実につらい思いを抱え、苦たりしたもの、なかなか死ねないでいました。それを知った友人が熱心にすすめました。

「一度でいい、ともかく教会に行つてほしい。いい教会を紹介するから」

熱意に動かされて、彼女はある日曜日、紹介された教会を訪れてみました。もちろん、初めての体験です。聖堂のベンチにそつと座つて待っていると、オルガンが鳴つて入祭の歌が始まり、司祭が現れました。司祭は祭壇に深々と頭をさげ、ゆつくりと十字を切り、口を開くと、こう言ったのです。

「ようこそ、神のみもとへ。今まで大変でしたね。本当につらい思いをしてきました。でも、神さまはすべてをご存知です。ご存知だからこそ、今日、ここに、あなたを導きました。よくいらつしゃいしました。もう、だいじょうぶです。安心してください。ここは神の愛の満ちるところ。神のみ心の行われるところ。主イエスは、この聖なるミサにおいてあなたに触れ、あなたを癒し、あなたを救ってください。信じます。ごらんください。信じる仲間が集り、天国の扉は開き



(ドン・ボスコ社)

難の道を歩んでいる人、すなわち今、絵本を開いているあなたも同じことです。イエスさまを信じて救いを求めるならば、イエスさまはあなたに向かって、「だいじょうぶ！」と宣言してくださいます。それを実際に体験してもらえ

るように、絵本のクライマックスは、イエスさまが読んでいる人になりました。さあ、喜びのうちに感謝の祭儀をささげましょう」

突然、彼女の心に光が差しこみました。閉ざされた魂が開いたのです。真つ暗闇だった世界が輝き始め、ミサの間じゅう彼女のほおを安心の涙が流れ落ちました。その女性はミサの後、すべてを司祭に打ち明け、招かれて入門講座に通うようになり、翌年の復活祭に洗礼を受けました。今では落ち込んでさまよった日々が嘘のように明るくなり、娘との天での再会を楽しみに、希望に満ちた信仰生活を送っています。そして、あのすべてがまったく変わってしまった日の衝撃を、繰り返し、繰り返して語ります。「そのとき、神さまが語りかけてくれたんです」と、福音、全開。

(文中イラスト／かにえ こうじ)

天国の扉が開く

人間は本来、本当に素晴らしい存在です。愛し合い、ゆるし合い、助け合い、真理を求め、正義を重